

# 日本語諸方言の韻律境界と領域<sup>1</sup>

## Prosodic Boundaries and Domains in Some Japanese Dialects

児玉望

KODAMA Nozomi

### はじめに

日本語学会 2010 年度秋季大会では、「音韻的な句のまとまりの形成と実現のあり方の変異」を主テーマとして「イントネーション研究の現在」と題するシンポジウムが開催された。この中で、五十嵐陽介氏と郡史郎氏の発表は、アプローチは異なるものの、重なる内容の現象について、共に日本語諸方言を取り扱った発表であり、今後のイントネーション研究にさらなる刺激を与えるものとなると期待される。ただ、惜しむらくは、おそらく時間の制約のために、「異なる立場からの研究で現在得られている知見をつきあわせ議論を深める」という趣旨とは裏腹に、両氏やその他のアプローチの違いがどのような成り立ちをもつものであるか、そのアプローチの違いがどんな分析の違いとなって現われるかが、必ずしも明確にはならなかった恨みがある。両氏の違いとしては、分析に統語的特徴を用いるかどうかと、音調的な句のまとまりを階層的に説明するかどうかとが主なものであると考えるが、小論では、特に後者について、日頃の勉強不足を埋め合わせながら、自分なりにより一般化して考えてみたいと思う。

語以上の単位を対象とする音韻記述では、何らかの境界によって区切られた領域や、発話内の分節に被さる何らかの素性（たとえばアクセント核）を仮定して、これらの分布や実現のあり方を過不足なく記述することを目標とする。領域としての「句」も、何らかの分節に被さる音声事実を基準にして定義されるものである限り、これを用いると用いないとに関わらず着目する音声事実は同じであるはずであり、これを分節の素性そのものとして考えるか、それを含む領域を仮定するかは、分節の素性と他の音声事実あるいは音声に関連した言語事実（意味）をどのように結びつけるかの違いとみることができる。「句」の根拠となる音声事実としては、その境界を決めるような近傍での具体的な分節素性に依拠する場合と、必ずしも境界には位置しない何らかの分節の素性の実現における変異を決定するようなルールの適用領域と想定されている場合とがある。後者では、境界の決定に際

---

<sup>1</sup>本研究は科研費（課題番号 2152041100）の助成を受けたものである。

して音韻論的というよりは形態論的な根拠を援用したり、あるいは、下位の構造の境界を上位に引き継ぐ形での階層を想定したりすることがある。

音声に関連した言語事実として分節連続に結び付けられるものとして、まず重要なのが「語」である。音韻論で境界を設定する場合の考え方としては、「語」や「文節」に対応するような音韻上のまとまりをひとつの領域と考え、これに特徴的な素性が発話内での環境に応じて変化するという考え方と、逆に「語」に帰することのできない（同じ語の音形でも境界にあるかどうかで変化する）分節素性の分布に着目した領域の立て方との2つがある。2種類の両方を立て、前者を下位、後者を上位とするような階層を想定するのが第3のタイプである。

本論文では、これらの考え方の違いが、いくつかの日本語方言でどのような分析の違いを生み出すかを検討する。特に、同じ分節音連続における異義の音韻解釈を通して過不足がないかを検討し、句を立てることの妥当性を検証する。筆者は、児玉(2008)において、鹿児島方言が階層的な韻律構造をもつことを主張し、同様な分析を東京方言にもあてはめてこのような階層性に普遍性があるかもしれないと示唆したが、この見解には修正が必要である。

## 1 境界と領域

服部四郎氏がアメリカ構造主義音韻論の「つぎめ音素 juncture phoneme」に代わるものとして「アクセント素」を提案してつぎめに囲まれた領域に「音節連続を1つにまとめる力」を仮定したのは1954年(1955年補説、服部 1960 収録)であるが、同時代の構造主義にもつぎめ音素とそれに囲まれた「分節 segment」を仮定して韻律構造的な分析にあてはめた例がなかったわけではない。一例として Kelly (1959)によるテルグ語の音韻分析をやや詳しく紹介する。

Kelly は、次のような二つの階層のつぎめ音素を設定し、上位のマクロつぎめ音素は下位のマイクロつぎめ音素を兼ねるとした。マクロつなぎ音節に挟まれた領域がマクロ分節、マイクロつぎめ音素に囲まれた領域がマイクロ分節である。

### (1) テルグ語のマクロつぎめ音素

/?:/ : 先行長母音が上昇下降調で延長、先行短母音が上昇調で短縮（1例のみ）

/!/ : 先行母音が高平調で延長

/##/ : 先行母音が低平調

### (2) テルグ語のマイクロつぎめ音素

/+/: 無休止の「強勢」開始位置。マクロ分節内部位置のみに可能な子音異音の出現を条件付ける

いずれも近傍の音節主音(peak)の超分節的特徴を基準に定義されており、これらの超分節特徴を、マクロ分節では右側、マイクロ分節では左側に仮想的な(分節的)音素として配置している。テルグ語は、発話内で「語」が連続する場合にその環境に応じた形態音韻交替(外連声)をもつ言語であるが、レベルの混同を避けるために「語」に言及しない構造主義音韻論において、「語」の発話内での実現形にほぼ相当するのがマイクロ分節である。マクロ分節がその内部で「外連声」が適用される領域となる。いくつか例を示す。

(3) a. [guṇḍ + undi#] 「たま guṇḍu がある undi」 (Kelly 1959. 例 17)

b. [gUṇḍ + UndI#] 「粉 guṇḍa がある undi」 (例 19)

(4) [a: + pən + če:ste:ʔdəbb + Ista:nu#]

「その a:仕事 pani をすれば če:ste:金 ḍabbu をやる ista:nu」(例 49)

[I U]は、/i u/の広い異音で、単語単独の発音では後続する音節の/a a:/に対する同化と解釈されるが、同化を引き起こす短い/a/が連声(内連声を含む)によって削除された場合にも現われ、また、この/a/の削除がつぎめ音素/+/を隔てて後続する/i u/の広い異音の出現を条件付けるため、マクロ分節全体に母音調和があるようにみえる(3a-b)。この 3a-b に対する Kelly の最終的な音韻解釈が 5a-b である。

(5) a. /guṇḍ + undi#/

b. /gauṇḍ + undi#/

5b 頭音節の/au/は、「(音節)複合主音 Complex Peaks」とされ、二重母音ではなく、母音調和を引き起こす一種の超分節音素 a が組み合わさったものとして扱われており、この a が途中で障壁がなければこの位置からマクロ分節末尾までに及ぶ範囲で同化を条件付ける。

(4)では、語境界に一致するつぎめ音素/+/が先行母音への同化の障壁となるため、この超分節音素の位置は最後の/+/直後に置かれ(/+aista:nu/)、この場合は長母音の a:が障壁となって後続母音への同化はおきないとする。音韻現象の領域をもつ音素として分節音素を立てるところが興味深い。

一方、つぎめ音素/+/は主として強勢という局所的な特徴を基準に立てられており、これによって区切られたマイクロ分節自体は領域としての特徴が弱い。たとえば、接語のような無強勢の語の接続では/+/が置かれませんが、この位置での連声が母音同化の障壁となっていることは考慮されない(6)。形態論上複雑な語では、語の内部に/+/が置かれ、2つのマイクロ分節に区切られる場合もある(7)。

- (6) a. [gu:ða:•?] 「巢 gu:ðu か？」 (例 22)  
 b. [gU:ða:•?] 「かご gu:ða か？」 (例 24)
- (7) [ne:n + če:se: + wa:ɳni#] 「私が ne:nu やったものだった」(例 68)  
 če:se:wa:ɳni 「する-名詞化形男性単数-1 人称単数」

テルグ語のピッチ低を伴う「強勢」は位置が語頭音節に固定しており、マイクロ分節は一型の「アクセント素」とみることができる。ただし、ピッチ実現まで考慮すると、この「強勢」の強弱あるいは「アクセント素の種類」を想定する必要がある。たとえば 7 の wa:ɳni は、指示代名詞男性単数対格形と同じ分節音連続であるが、独立した語である指示代名詞が第一音節からのピッチ上昇を伴いうるのに対して、7 の接辞連続の wa:ɳni は常に低平となる。ここにつぎめを置くのは、「(主)強勢」ではなく、ピッチ変化が不連続になるような急なピッチ下降がつぎめ音素/+/の基準となっていることを示している。挙げられた 70 の発話例からも、マイクロ分節がピッチ変化が連続的な領域に相当しそうなことがわかるが、このことが明示的に述べられているわけではない。

Kelly の関心の中心がテルグ語の発話の韻律構造、つまり各種強勢・声調の分布ではなく、母音の同化と外連声であり、つぎめ音素や機能不明なマイクロ分節の仮定が「語」という概念を用いなくて外連声を記述するための苦肉の策であったことは、この問題に関する次の論文(Kelly 1963)が外連声を正面から取り扱った論文であることから明らかである。SPE(Chomsky & Halle 1968)以降、語の音韻を基底として派生規則を仮定して変異を記述するのが主流になると、Kelly のデータは Wilkinson(1974)によって順序をもつ局所的な同化規則群として再解釈されるが、テルグ語の強勢やピッチの問題が再浮上することはなかった。

SPE は、レクシコンで音韻指定された「語」を基底におく音韻論であり、定義の曖昧なつぎめ音素に代わり、弁別素性として[-segment]が指定されて分節に関する素性とは区別される境界 boundary を新たに設定して基本単位とした。SPE で規定される境界は、すべて語とその内部のものである。

#### (8) SPE の境界

- #: Word Boundary [-seg -FB +WB]
  - +: Formative Boundary [-seg +FB -WB]
  - =: The Boundary = [-seg -FB -WB]
- (Chomsky & Halle 1968: 364-372)

SPE の境界は基本的に局所的な単位であり、境界/=/のように、何の領域も定義しないも

のも含まれる。これらは、音韻規則の適用に際する障壁として機能するが、音声的に実現する対応物をもつ必要がない。SPE では、発話全体の音声的实现にはパラ言語的なパフォーマンスの要素が関与するとしてこれを音韻理論で取り扱うことには慎重で、主として複合語など形態音韻論的な領域での音声的实现に関する音韻規則を仮定した。

しかし、アクセント核をたかだか1個含むアクセント素という領域が既知であった日本語音韻論では、SPE の受容後ただちに語境界に関わる音韻規則がアクセント素連続に置き換えられて、文音調の分析に応用される。早田輝洋氏は、SPE の強勢規則を応用して、複雑な複合語や文音調におけるアクセントの弱まりを語構造や句構造に応じて決定する音韻規則を提案した(早田 1969)。アクセントの弱まりは、「アクセント境界の弱まり」であり、さらに、先行境界より弱い境界を消去する規則群であったが、早田(1972)ではアクセント句境界の強さをアクセントの高さ(と強さ)と定義し、無核アクセント句が先行する場合に限定して境界が消去される融合規則に改められた。

東京方言アクセントのこの「弱まり」に関してはアクセント研究の早期から知られていたようであるが、アクセントの弁別特徴の分析の過程で語の弁別に関与しないとされた(弱まらない位置での)語頭の上昇を境界特徴として、複数の語や文節を含みうる領域である「句」を提案したのは川上薫氏である(川上 1956、1957b)。川上氏は、東京アクセントについて語によって位置が指定されるアクセント核はピッチの下降だけを決定し、ピッチの上昇は「句音調」であっていくつかの弁別的なパターンがあると分析した。

川上氏は「句」の内部にはアクセント句のような下位のまとまりを設けないが、早田氏のアクセントの「弱まり」との関連でもっとも大きな違いが出るのが無核の語が先行する連続である。川上氏の分析では単にアクセント核がないために次の語にそのまま連絡するだけであるが、早田氏の分析では、まず「弱まり規則」を適用して、後続のアクセント句が弱い場合にはアクセント句境界を削除する規則が設けられることになる。この違いが及ぼす影響については次章でやや詳しく論じる。

SPE の分析では、分節音と境界が線形に配列されるだけであるが、強勢や母音調和など超分節的な音韻現象への関心から、語未満のレベルでも語以上のレベルでもさまざまなまとまり(構造)を想定する分析が求められるようになり、線形の音素配列のほかこれとは独立して素性が配置される自律分節層を立てて相互の層を結びつける自律分節音韻論と平行して、境界に区切られたさまざまな領域が階層的に構成する韻律構造モデルが提案された。イントネーション音韻論の枠組みを提唱した Pierrehumbert による日本語韻律構造の分析 JTS(Pierrehumbert & Beckman 1988)も、このような韻律構造階層を仮定するものであ

り、モーラ位置アクセントをもつ語の上に、アクセント句とその上位の中間句の階層を認める。アクセント句は語境界の中で境界声調としての L%に区切られた領域であるのに対し、中間句は境界声調 L%の中で、先行アクセントによって引き起こされる、後続のアクセント声調 H(L)や無核語の句声調 H などの全般的なピッチ低下 (catathesis)を妨げるような境界によって区切られている。

JTS のアクセント句は、生成音韻論の日本語音韻研究で一般に用いられているのと特に大きな違いはない。中間句は、有核のアクセント句が先行する場合には H のピッチが段階的に下降するので、アクセントの弱まりが順行的に適用される場合とも見ることができる。また、句音調による上昇が起きない領域と考えれば川上氏の「句」とも似ている。

JTS の韻律構造モデルは、日本語（東京方言）の韻律ラベリング方式である JToBI に採用され、国立国語研究所の『日本語話し言葉コーパス』への実用に向けて X-JToBI として改訂されたが、この分析法では JTS の中間句は最上位の発話 utterance と統合されてイントネーション句と呼ばれ、無核アクセント句の後で「文節境界にピッチレンジの上昇が知覚される」アクセント句境界(BI=2)のうち、先行文節と比べて「ピッチレンジの拡大」が観察されるものにこの上位の句境界(BI=3)が付与されている<sup>2</sup>。無核アクセント句の後ではこの2種の境界がともに川上氏の分析での「句」の境界にあたりと考えられるが、有核アクセント句のあとでは BI=3 のみに対応する。

## 2 境界の検証 - 東京方言

以上のように、東京方言の句のまとまりの分析は、次の3種類に分類できると思われる。

- I 「句」: 上昇方向の句音調によって境界付けられる。複数のアクセント核を含みうる。句音調が可変。
- II アクセント句: 境界声調（低）と句声調（高）によって境界付けられる。1個以下のアクセント核を含む。それぞれの性質が可変。
- III 上位句: 1個以上のアクセント句の連続。境界でピッチ下降のリセット。

川上氏や上野善道氏(上野 1984 など)は句を認め、その内部に境界を設定しない。早田氏や郡史郎氏はアクセント句より上位に領域を認めるのではなく、アクセントの弱まりを想定する。JTS や JToBI/X-JToBI は、アクセント句とその上位句の2階層の領域を認める。このような句の設定は、具体的にはどんな分析の違いを生むのかを、次のような境界要素

---

<sup>2</sup> 五十嵐陽介・菊池英明・前川喜久雄(2006:420ff)

の位置のみで弁別される分節連続から成り立つ発話のペアを考え、境界要素が欠けた場合の同音多義をどのように予測するか、という観点から考えてみる。"]"はアクセント核、#が境界位置である。

(9) 有核 + 有核

- a. ツギ]ニ#ジューマ]ン 「次に 10 万」
- b. ツギ]#ニジューマ]ン 「次 20 万」

(10) 有核 + 無核

- a. ツギ]ニ#センエン 「次に千円」
- b. ツギ]#ニセンエン 「次二千円」

(11) 無核 + 有核

- a. ハジメニ#ジューマ]ン 「はじめに 10 万」
- b. ハジメ#ニジューマ]ン 「はじめ 20 万」

(12) 無核 + 無核

- a. ハジメニ#センエン 「はじめに千円」
- b. ハジメ#ニセンエン 「はじめ二千円」

境界が存在し、二句の構造であれば、これらは弁別可能であり、境界特徴が存在しない一句の構造であれば弁別できないはずである。弁別可能である場合、関与する特徴はさまざまであると考えられるが、これらはみなその句の境界表示に関わる音声的特徴であるとみなすことができる。

「句」だけを立てる分析の場合、この境界は「句」であり、ひとつの句としての発話では 9-12 は 13a-d のようにすべて弁別不能となるはずである。

(13) a. ツギ]ニジューマ]ン

b. ツギ]ニセンエン

c. ハジメニジューマ]ン

d. ハジメニセンエン

ただし、「句」の境界の代わりに、有核語に接続する助詞のように、アクセント核を挿入することができる場合に挿入したり、あるいは、13a や 13c の「ジュー」の頭子音を何らかの境界に特有な調音とみられる破擦音で発音するというように、分節レベルでの弁別特徴を追加することは可能な場合がある。たとえば 14a は 9a のみに、14b は 10a のみに理解される発話でありうる。

(14) a. ツギ]ニ]ジューマ]ン

b. ツギ]ニ]センエン

しかし、9b, 10b, 11b, 12ab は、「句」の境界に関わる特徴を入れない限り、どう発音しても曖昧になる、というように予想される。

アクセント句を認める立場では、アクセント句の境界特徴が弁別に関与し、弁別がないのは1アクセント句への統合が起きる場合、ということになるが、ところが、アクセント句はアクセント核が1個以内、という制約があるため、13a のようなアクセント句はありえない。このため、10-12 では同音異義による弁別不能が生じうるが、9a と 9b の二つは音韻論的に異なる音形しか持ちえず、弁別がむずかしいとすればそれは構造には由来しない理由（たとえば句頭境界音調の非実現）による、ということになる。このような非対称は X-JToBI の韻律分析手続きにも引き継がれており、無核文節を含むような文節連続の境界での BI 決定にあたっては間に境界声調 L%が認められるかどうかによってアクセント句境界の有無(BI=2:1)が決定されるのに対し、二つの有核文節の間では BI=1 を取りえない。分析者は必ず存在するはずのアクセント句境界 L%の位置を特定することが求められることになる。

(15) B=1

- a. \*(%L)ツギ(A)ニジューマ(A)ン(L%)
- b. (%L)ツギ(A)ニセンエン(L%) =10ab
- c. (%L)ハジメニジューマ(A)ン(L%) =11ab
- d. (%L)ハジ(H-)メニセンエン(L%) =12ab

以上のように、アクセント句を認めるかどうかで、構造的な同音多義の有無について異なる予想が得られることになる。直感的にはアクセント句を認めない場合の予測のほうが正しいように思われるが、母語話者の判断はどうであろうか。

境界が存在して弁別がある場合には、「句」あるいはアクセント句の可変性に応じて多様な音声的区別が実現するはずである。階層構造を想定する場合には、これらの境界による区別は、アクセント句境界のみの性質によるものと上位句境界の存在を反映するものとの理屈上は二分される。ただし、JTS の場合は、どれが上位句にあたる中間句の境界になるかは必ずしも判断できない。JTS での中間句の境界は、特定の境界音調によってではなく、先行アクセントが引き起こすピッチ低下に対する障壁として定義されているからである。先行アクセント句が無核であれば障壁の効果は本来現われないので、後続アクセント句のピッチが先行無核アクセント句より高くても間に中間句境界があるとはいえない(JTS p170 参照)。



必ずしも音韻構造を反映しているとは限らない実際の発話例に対して境界を決定してある程度音声的な事実をも反映した韻律ラベリングをしなければならない X-JToBI では、上位句であるイントネーション句の境界を、先行句が有核であると無核であるに関わらず先行アクセント句からの「ピッチレンジの拡張がある場合」として、機械的に分類している。音声的な分類としては客観的で有意義であろうが、音韻論的な妥当性はあるだろうか。特に、アクセント句境界の有無の判断の非対称とあわせれば、有核アクセント句同士の間には2種類、無核アクセント句を含む組み合わせでは3種類の境界、ということになると、首を傾げたくなる。

これに対して、アクセント句境界を指定するほうが望ましいのではないかと思われる同音異義的な組み合わせもある。

(16) a. 白勝った

b. 白買った

c. 白かった

(17) a. シ]口#カッタ

b. シ]口#カッタ

c. シ]口カッタ

17b は、境界が消去された場合に 17c と同じ配列になる。「句」の境界は削除が可能であり、削除された場合には 16b が 16c とも解釈できる音形で発音されることを予測する。しかし、16b は境界が削除された場合でも 16a とは弁別可能な発音でなければならないのに対し、16c には 16b よりも 16a と似た発音も可能である、ということがこの表記には反映されていない。このような実現形の変異の幅を音韻表記に反映させるには、16b と 16c のいずれかあるいは両方の表記を変更しなければならない。16b を変更するとすれば、「句」のほかにアクセント句に相当する下位領域を認め、16b の境界が「句」の境界として実現する場合と、下位の境界として実現する場合があり、後者が 17c と重なる音声的实现をもつ、と考えるのがもっとも単純である。

一方、17c に発音に応じた複数の音韻表記を施す方向での修正も可能である。この場合には、「白かった」には音韻的に区別されたいくつかの異形態がある、ということになる。X-JToBI は、主としてアクセント核の後に長い音節連続をもつ語にみられるこのような異形態的な音形の変異を記述する手段をもっている。特に、アクセント句にはアクセント核が複数あってはならない、という制約のために、語中に2回以上のアクセント核が知覚されれば語境界以外の位置で2アクセント句に分割しなければならないという音韻解釈上の

理由が関係すると思われるが、17b のような、後部が無核となる分割も、アクセント句境界音調が見出されれば同じように2句に分割される。このために導入された語と一致しないアクセント句境界標識が W である<sup>3</sup>。

(18) BI=2 (アクセント句境界)

- a. (%L)シ(A)口(L%%L)カッ(!A)タ(L%)
- b. (%L)シ(A)口 L%%L カッ(!H-)タ(L%)
- c. (%L)シ(A)口 W カッ(!A)タ(L%)
- d. (%L)シ(A)口 L%W%L カッ(!H-)タ(L%)

(19) BI<2

- a. (%L)シ(A)口カッタ(L%) (白かった/白買った/\*白勝った)

16c は、イントネーション句境界なしで発音された 16a(=18a)とほぼ同音であれば 18c、16b(=18b)と同音であれば 18d のように解釈されると思われる。18a は中間の境界音調の有無に関わらず2アクセント句に分割されることは再三繰り返している通りである。

しかし、これらの変異形のひとつひとつをそれぞれ音韻的に異なる異形態とみなすのは無理がある。アクセント核に後続する音節が増えるほど変異形が増えていくからである。たとえば、「白かったら」は、「白勝っ(っ)たら」「白買った(っ)ら」にそれぞれ似た下降パターンのほかに、後半部にアクセント核が認められず有核+無核の2アクセント句の連続に聞こえる実現形がある。しかも、このような「語と一致しない」(W に区切られた)無核アクセント句が通常の無核アクセント句と同様にさらに後続のアクセント句と結合する、という可能性があるとする、たとえば 20a のような連続ではアクセント句の境界をどう置くかによる異なる音韻表示がさらに増えていく。

(20) a. 白かったら白かったで

- b. シ]口カッタラシ]口カタデ

20b はアクセント核が2つのみの最も単純な実現形であるが、それでも1個のアクセント句境界が必要で、これが置ける位置は間の分節カッタラシのどの音節境界でもありうる。

児玉(2008)では、16 のような組の音韻的対立を念頭に、「無核アクセント句が有核アクセント句に後続する位置以外で境界表示しないことを境界削除規則によらずに示す」ことができるようなアクセント句音韻表示を提案した。この提案では、16 の音韻表示は 17 の境界にアクセント句境界によるものと「句」境界によるものの2種を仮定する階層構造とな

<sup>3</sup> 五十嵐陽介・菊池英明・前川喜久雄(2006:358, 436ff)

る。しかし、このようなアクセント境界が音声的に実現するのが有核アクセント句の後だけであるとすれば、この境界はむしろ、アクセント句の境界ではなくアクセント("[j]")の境界、正確に言えば、アクセントの力の及ぶ領域（アクセント領域）の境界として設定すべきであろう。

- (21) a. シ]ロ>カッタ 「白買った」  
 b. シ]ロカッタ> 「白かった」  
 c. シ]ロカッタラ>シ]ロカッタデ> 「白かったら白かったで」  
 d. ダイ]>ジングー]>サマノオカゲデ 「大神宮様の御蔭で」(児玉 2008 例 40 参照)

アクセント領域は、アクセント核("[j]")のおかれる音節を含み、境界">"までであると考えられる。アクセント領域内の分節は全体として(あるいはアクセント近傍での最大の下降に続き)下降が実現すればさまざまな下降曲線をとるが、アクセント領域外では連続した非下降調、と考えれば、これらの様々な実現形は特定の語のもちうる異形態であると解釈する必要はない。また、アクセント句の境界を見出すのが悩ましい低い位置での付属語の連続についても、単にアクセント核とその領域だけを記述すればよいことになる。

東京方言にアクセント領域を仮定するメリットはほかにもありそうである。X-JToBI は新たに「プロミネンス層」を導入して「アクセント句次末モーラに生じた非語彙的な卓立」<sup>4</sup>を PNL<sub>P</sub> として記述している。PNL<sub>P</sub> は、語彙的にアクセント核が指定されない句次末位置においてピッチ上昇とアクセント核による下降に似たピッチ下降（「ディズニーラ]ン[ド]デ」）をいう。X-JToBI はこれを句末境界音調 L%HL%が 2 モーラに拡大したものと分析しているが、似た音調曲線と位置をもつ川上(1957a)の言及する微小部分へのプロミネンス（カラコ][ル]ムトモ）まで含めるとすると、境界音調に結びつけるのはむずかしいし、また、語彙の指定するアクセント核を除外するのは不自然である。

- (22) a. カッ][タ]ラ> 「勝ったら」  
 b. カッ][タ]ラ> 「買ったら」

興味深いのは、このような卓立がほぼアクセント領域内部に限られるように思われることである。無核語に現われる例があるだろうか。

- (23) コ]ン[ド]ワ> 「今度は」 コ]ンド[コ]ソ> 「今度こそ」 ソ]ロ[ソ]ロ> 「そろそろ」  
 ナ]ン[デ]モ> 「何でも」 ナ]ニガ>ナ]ン[デ]モ> 「何が何でも」

<sup>4</sup> 五十嵐陽介・菊池英明・前川喜久雄(2006: 359, 460ff)

コン[リ]ン[ザ]イ> 「金輪際」 コーシ]エン[デ]モ<sup>5</sup>> 「甲子園でも」

X-JToBI 開発をはじめ、近年の音声コーパスを利用した研究の進展でプロミネンス現象の分析が進みつつあるのは心強いが、逆に「アクセント領域」外でのアクセントから予想されない音形として筆者が気になった例をひとつ挙げておく。

- (24) a. ア[キラメ#ラ[レ]ナイ>(んすよ) (落語『船徳』口演)  
b. ワ[スレ#ラ[レ]ナイ(んすよ) (作例)

24ab は、通常なら 1 句で発話される句が、2 句に分割されてそれぞれが上昇レンジが拡大された境界声調をもつ強調的な発話である。単なる 2 句の連続とは異なり、開始ピッチや上昇レンジに相関があり、またアクセントも 1 句の場合の語彙による指定を引き継いでいるので、「句」の実現の変異形の 1 つと解釈することができそうである。このような句分割による強調が成立する条件はどういうものだろうか。

### 3 「句」の方言差

前章では東京方言の韻律研究においては、階層構造を考えるのではなく開始部の境界音調(中立位置からの有意な上昇)の存在のみで定義された「句」を基準とすべきこと、「句」の内部には語によって指定された分節音配列とアクセント核により開始されるアクセント領域のみを含むものとし、イントネーション現象については「句」の実現形の変異として記述すべきことを主張した。

JTS は、中間句(とそれを定義する Catathesis)の通言語的一般性を強く主張しているが、アクセント句については東京方言独自のものと規定しているようで、大阪方言の分析には不必要であるとしている。大阪方言の場合は(いわゆる高起と低起に対応すると思われる)境界音調が語によって指定されていて、また、東京方言で提案されたようなアクセント句の統合規則がないことなど、アクセント句を定義するに十分な音韻論上の根拠がないとみているためであろう。一方で、東京方言についてのような精密な分析はないものの、多くの音声データから、東京方言と同様な中間句があるだろうと推定している。

川上(1962)、川上(1964)、上野(1989)の京阪方言のアクセントの「句」としての実現に関する先行研究を読む限りでは、JTS が仮定したような、Catathesis(ピッチの段階的降下)の障壁としてのみ実現する句境界は、東京方言よりはむしろ京阪方言に観察されるといえるように思われる。

---

<sup>5</sup> 児玉 2008 では、東京方言の助詞がアクセント句をなしうる例として挙げたが、適切とはいえない。

語のアクセントの型に応じた声調の分布を以下のようにまとめる。

(25) 京阪方言の語のアクセント型

- a. 高起(平進)無核 [H
- b. 高起(平進)有核 [H]L
- c. 低起(上昇)無核 RH
- d. 低起(上昇)有核 RH](L)

R: 上昇調 [音節頭上昇]:アクセント核 L: 平調 H:高平調または高

Hは必ず[かRに後続するので冗長であるが、どのアクセント型でも上昇ターゲットがあることを示すために表記する。上野(1989)は、この点を重視して低起式を上昇式と言い換えたが、平進の場合でも冒頭での上昇はあるので、いわば「早上がりまたは急上がり式」と「遅上がりまたは緩上がり式」とみなすわけである。ピッチ上昇にかかる時間による対立は、ピッチ上昇の加わる時間が短いと弁別の維持がむずかしいが、1音節語が長く発音される京阪方言はその点では有利である。

このような声調配列に対して「句」の内部で適用される変化は、以下のように規則化できる。順序は a/b c d eの順に適用されるとする。

(26) 京阪方言「句」規則

- a. [H / [H\_ (上がり止め規則 1)
- b. H H]/\_R (上がり止め規則 2)
- c. RH L/\_ [H (最遅上がり規則)
- d. H !H]/.\_ (上げ渋り規則 上昇ピーク H>!H)
- e. (R!H L/\_ #) (任意の平板化規則)

いずれも、「句」の最初のHより後続のHが高くなるようにする規則である。26d以外は無核語の語末のHに関係する。26abは、それぞれ無核語後続の早上がり、遅上りの上昇を制御する。続くのが早上りの場合はその場で上昇を止めるだけであるが、遅上がりでは時間差をおいて上昇してくるため、予めアクセント核によってピッチを下げるとみる。「句」の境界があればこれらの規則が適用されないため、27abのような境界のあとでピッチ上昇が続く二句構造が可能である。26cは、遅上がり無核に早上りの上昇が続く場合、上がりが極限まで遅くなり、次の語冒頭の上昇と融合して1回分の上昇を節約する、という実現規則である。この規則が阻まれる二句構造では、両方の句でH(上昇)が2回にわたって実現されていなければならない(27c)。

- (27) a. [コノサカナ#[モラウ]デ 「この魚#もらうよ」

b. [コノサカナ#タベ[ル]デ 「この魚#食べるよ」

c. ヤサ[イ#[モラウ]デ 「野菜#もらうよ」

26d は、26b で追加されたものを含め、アクセント核によって下げられたピッチの上昇による回復が元の H には達しない、という Catathesis を実現する規則である。句境界によって規則 26b、26d が阻まれた 28 では、後続のピッチ上昇が発話頭のそれを超えてもよい。28 では、句全体としての最高上昇点に向けてではない低い位置のピッチ上昇がアクセント核が後続しない位置では省略されてもいい、という 26e が適用されているため、二句の間は平板に接続する。

(28) [コノ]ヤサイ#タベ[ル]デ 「この野菜#食べるよ」

京阪方言の「句」の東京方言のそれとの大きな違いは、東京方言では「句」の開始に際して先行「句」のピッチのリセットが行なわれ、新たに上昇を開始する、という境界声調パターンによって定義されているのに対し、京阪方言ではほとんどそのような形での定義ができない点である。先行の句のピッチがリセットされる必要がないことは、27 と 28 の例で先行「句」から継続してピッチ上昇が続いていることからわかる。また、後続「句」の遅上がりが前の「句」から平板に続いていることから、特定の境界声調が不在であると予想される。1 句構造と 2 句構造で同じ音形になるため、アクセントの「式」を知らなければどちらか判断がつかない場合もある。

(29) a. [モー#[アカン 「もう#だめだ」

b. \*モー[アカン 「もうだめだ」

c. [モーアカン]ノ R% 「もうだめなの？」

29a は、[モーが「高起」であることを知らなければ、音形だけでは「低起」にはじまり 26c が適用される 1 句構造が実現する音形(29b)との違いの判断がつかないと思われる。どちらもピッチ上昇で句切られた平進の分節連続で現われ、「高起」であっても低く実現される場合があるからである。29a が 2 句であるという判断は、26a が適用された 29c との音形の違いに依存する。

以上、全ての語が上がりピーク H とそれへの語頭からの上昇曲線の型（「式」あるいは「語声調」）をもつと考えられる京阪方言で、この H の実現を抑制する規則 26a-d の適用範囲となる語連続として「句」が定義されることを示した。この「句」の音声的实现は東京方言のそれとはずいぶん異なるが、興味深い点は、句境界の機能自体は両方言でよく対応しているようにみえることである。つまり、東京方言で「句」の境界の有無によって区別されているような意味やニュアンスの差は、京阪方言でも同じように実現されているら

しいのである。

川上(1962)と上野(1989)はともに、京阪方言での「句」の実現形として、抑制された!Hではなく H を欠いて上がりがないために「式」の対立が中和された形をも記述している。「句」の実現にどのような変異がありうるかはイントネーション記述において非常に重要な点であるが、特定の境界音調をもたない京阪方言の「句」においてはこの H の上がり幅が可変部として重要な機能をもっている可能性がある。たとえば、東京方言の副詞マタは、後続する発話全体とひとつの「句」を構成する構造に現われて句音調の上昇を大きく速くする（低くはじめて一気に上げてタにピークを置く）発音が同じ事態の反復に関する話し手の失意・困惑や聞き手に対する不満の表明に用いられるが、京阪方言では[マ]タと組み合わせると H の上昇をまったく欠く 1 句構造がほぼ同じ機能をもつらしいという情報をコンサルタントのコメントから得た。

(30) 中立的 1 句構造

- |                       |              |
|-----------------------|--------------|
| a. [マ]タ![サカナモ]ロタ      | 「また魚もらった」    |
| b. [マ]タ![ラ]ーメン![モ]ロタ  | 「またラーメンもらった」 |
| c. [マ]タヤサイ![モ]ロタ      | 「また野菜もらった」   |
| d. [マ]タ![サカナ]タベ(!H)タ  | 「また魚食べた」     |
| e. [マ]タ![ラ]ーメンタベ(!H)タ | 「またラーメン食べた」  |
| f. [マ]タヤサイ(!H)タベ(!H)タ | 「また野菜食べた」    |

(31) R!H/!H L (情意的 1 句構造)

- |                  |
|------------------|
| a. [マ]タサカナモ]ロタ   |
| b. [マ]タラ]ーメンモ]ロタ |
| c. [マ]タヤサイモ]ロタ   |
| d. [マ]タサカナタベ]タ   |
| e. [マ]タラ]ーメンタベ]タ |
| f. [マ]タヤサイタベ]タ   |

(32) 「式」の弁別の喪失

- |                |                      |
|----------------|----------------------|
| a. [マ]タ![アメ]ヤ  | 「また飴だ」(中立的 1 句構造)    |
| b. [マ]タアメ(!H)ヤ | 「また雨だ」(中立的 1 句構造)    |
| c. [マ]タアメ]ヤ    | 「また飴/雨だ」(expressive) |

東京方言での「句」境界音調の極大化に対して、京阪方言では句頭の H の卓立を極大化するために句頭以外の H を最大限抑制している、というように解釈できるかもしれない。

全体としてのピッチ低下による音声的なレベルでの非実現でないことは、アクセント核によるピッチ降下が影響を受けないことからわかる。語頭の「式」は語境界表示の機能もあることから、「式」の削除は一種の境界削除のようにも見えるが、これによってアクセント核が影響を受けないということは、これがアクセント句境界削除のような領域の変化ではなく、弁別素性の局所的な変化の連動であるということを示している。「式」とアクセント核は語の中に隣接して線形に配置されているというだけであり、「句」の下位となるような音韻論上の領域をなしていると思えず根拠はない。「式」は語頭にはじまり「核」または語末に区切られた分節音連続を一種の局所的な領域としてまとめているが、アクセント核が東京方言のように領域をもっていると考えべき証拠はない。

一方、鹿児島方言はアクセント句を単位としており、アクセントの素性をもたない付属語がアクセント素性をもつ語に連続して、このアクセント素性(A または B)が句全体としての音形を決定するということが、研究史上の早期からよく知られた事実である。児玉(2010b)では、アクセント素性をもつ複数の語が1アクセント句に統合するアクセント句境界削除の現象について記述した。また、児玉(2008)では、これらのアクセント句を単位として、東京方言の「句」に相当するような上位の音韻句をなす階層構造があることを主張した。これらの点に関して、特に境界と領域の性質を中心に再検討してみる。

### (33) 鹿児島方言のアクセント句

a. A 型  $|(L)\$F| \sim (2 \text{ モーラ末音節}^6)|(L)\$LF|$

b. B 型  $|L|$

F: 下降調    ]: 音節間下降    L: 平調    \$: 音節境界    |: アクセント句境界

鹿児島方言のアクセント句境界は、周辺の分節に境界音調として実現する。A型アクセント句では境界に先立つ1音節以下の下降調、B型アクセント句では音節間下降をとる。京阪方言と同様に、それぞれ早下がり(緩下がり)調、遅下がり(急下がり)調と呼ぶこともできる。ともに次アクセント句冒頭ピッチを下げる。下降部に先行する非下降部Lは、「句」の音調が実現する領域である。

### (34) 鹿児島方言の「句」境界と句音調領域の実現

a. {: ピッチリセット

b. L  $(L)\$[H/\{\_ \$F/]$  (音節声調 H)

L  $[H/\{(L)\$\_F$  (2モーラ音節頭上昇)

<sup>6</sup> 鹿児島方言の「モーラ」をどう考えるかについては、児玉(2009)参照。



L L[H/{(L)\$\_] (B型2モーラ末音節)

c: L (L)\$[!H/{\_SF/]} etc.

L (L)\$[!H!/H.\_SF/]

L (L)\$[H!/H.\_SF/]} (しみじみ調)

鹿児島方言の「句」の境界は、構成するアクセント句の境界によって決まり、左側には特定の境界音調をもたない。アクセント句境界のうち、先行する句の低い境界音調を引き継がないのが「句」の境界である。しみじみ調以外のイントネーションの「句」では、最初のアクセント句末の直前1箇所には1音節以下の高ピッチ領域が現われる。句音調領域の長さに応じて、実現形は音節冒頭の短いピッチ上昇(早上がり [H])や、低平調の音節連続のあとに1音節高平調に終わる遅上がりの曲線 LSH になることもある。複数のアクセント句から成るしみじみ調イントネーションは、「句」内のすべてのアクセント句の句音調領域の末尾に同様な高平調が現われ、最後のアクセント句の高平調がもっとも高い。しみじみ調では句音調領域の開始位置は先行アクセント句の境界音調がリセットされないため、「句」境界が間にあるために境界前後に H がある場合との弁別が可能であると考えられる。

児玉(2008)では、児玉(2005)、児玉(2006)のような、A型アクセント句で次末、B型アクセント句で句末にアクセント核を想定する分析ではなく、33のような、アクセント句末の曲線音調の対立に基づく体系を提案した。この点を実証するために、東京方言の9-12と同様に、境界要素を欠き弁別がアクセント核の位置によってのみなされるのであれば、弁別がなくなると予想されるような組の発音の弁別について説明する。

(35) a. カワ]ニ#ジュー]エン 「川に(A)十円(A)」

b. カワ]#ニジュー]エン 「革(B)二十円(A)」

(36) a. カワ]ニ#センエン] 「川に(A)千円(B)」

b. カワ]#ニセンエン] 「革(B)二千円(B)」

全体としてひとつの「句」で発音した場合は、(この場合は適用がなさそうな「しみじみ調」でなければ、)37-38のように1箇所だけ高音節が現われる実現形となる。早い発話では弁別が困難である。37abについては、筆者の内省では37aでジュの頭子音が破擦音であるのに対し37bでは摩擦音という区別が一貫しているが、鹿児島方言全体のアクセント句の境界特徴であるかどうかはわからない<sup>7</sup>。しかし、全体としての発話のテンポを落とすと弁別が容易になることから、境界付近の音節の緩下がり(F)と冒頭の急下がり(I)のような曲

<sup>7</sup> この数年授業で九州各地出身の学生に内省させているが個人差もあるようである。

線声調の違いによる弁別があることがわかる。39abのように、弁別部の音節が長いときには、あまりテンポを落とさなくても弁別しやすい。

(37) a. カ[ワ\$ニ(F)|ジュー]エン

b. カ[ワ||ニジュー]エン

(38) a. カ[ワ\$ニ(F)|センエン]

b. カ[ワ]ニセンエン]

(39) a. カ[ワ\$ジュー(F)|ゴマン]ト 「川じゅうゴマンと」

b. カ[ワ||ジューゴマン]ト 「革十五万と」

2 箇所の高平音節をもつ 2 句の構造では、アクセント句境界位置を示す曲線音調による弁別に加えて、「句」の境界の位置を示す特徴による弁別が可能になる。具体的には、ピッチがリセットされるために、境界後の音節の開始位置のピッチレンジは自由度が大きくなる。たとえば、41a のセンは前のニより高くても低くてもいいし、41b のニは冒頭のカより低いピッチで現われてもかまわない。

(40) a. カ[ワ\$ニ(F)#[ジュー-\$F エン]

b. カ[ワ]#ニ[ジュー-\$F エン]

(41) a. カ[ワ\$ニ(F)#セン[エン]

b. カ[ワ]#ニセン[エン]

「句」開始位置のピッチがリセットされていることで、句音調領域の実現の可変性は大きくなるが、このピッチはほぼ[H の上昇開始のピッチと連動しており、[H の実現形の変異がイントネーションに関与しているとみられる。たとえば、「[マ]タ(F)」を用いた失意・困惑・不満の表明では、[マの冒頭]にかなり低い位置からの急激なピッチ上昇によって中立的な発話と区別される。後続のアクセント句に「句」の境界が現れない点は東京方言や京阪方言と同様である。

鹿児島方言の「句」の変異にとって重要であるこの H は、アクセント句内での位置は固定しているが、「句」境界との位置関係は最初のアクセント句の長さに依存して変わる。開始ピッチが可変であることも合わせると、早上がりだったり遅上がりだったりする鹿児島方言の「句」境界は具体的な音声的実現に対応するものとしては定義しにくい。むしろ、京阪方言のような「句」内で適用される規則の障壁としての境界であると考えたほうがよさそうである。この考え方から、アクセント句の記述に隣接アクセント句との接続に関与する弁別には冗長な特徴を加え、1 音節となる H をもち末尾に次のアクセント句開始ピッチを下げる境界声調をもつものとして定義し直して。型の弁別は、H と L%の間の下降

曲線によるものとする。「句」境界が阻むのは、H の消去規則や段階的な上昇規則(しみじみ調)である。

(42) 鹿児島方言のアクセント句(改)

a. A 型 (L)\$H\$FL% ~ (L)\$HFL%

b. B 型 (L)\$H]L% ~ (L)\$LH]L%

(43) 鹿児島方言「句」規則

H L/L%..\_ (早い者勝ち規則)

H H(n+1)/H(n).L%..\_ (しみじみ調分かち合い規則 H H(0)指定時。

ただしピッチは  $H(n) < H(n+1) < H$  とする。)

「句」境界内では(あえて句最初の H を抑制しない限り)上昇が阻まれるという点では京阪方言の「句」と似た分析になっている。ただし、鹿児島県内の二型アクセントにはさまざまな「句」の実現パターンがあり、句頭からの高平調や低平調など「句」の境界声調が存在するとみなしうるものもあるので、早田輝洋氏の語声調の類型に一般に共通としてとらえるべきものではない<sup>8</sup>。

鹿児島方言のアクセント句のほうは、句末境界声調によって音声的に境界が実現している。このため、付属語が低い位置で連続するような場合でも(イントネーション句末音調の被さる終助詞部で型の判断に迷うことを除けば)アクセント句境界の判断に迷うことはない。アクセント句境界の置き方の揺れによると判断できるような発音の揺れもある。

(44) a. オモシロカッ[タン\$ジャ(F)|ナイ]]デス]]カ=FR%

b. オモシロ[カッ\$タン(F)|ジャナイ]]デス]]カ=FR%

「面白かったんじゃないですか」

(45) a. ツマラナカッタン[ジャ]]ナイ]]デス]]カ=FR%

b. ツマラナカッ[タン]]ジャナイ]]デス]]カ=FR%

「つまらなかつたんじゃないですか」

以上のような鹿児島方言の韻律構造に関する再検討をまとめる。鹿児島方言の場合、アクセント句が存在することに対する異論はまずないと考えられる。よく知られている通り鹿児島方言は語のピッチ形がその語が現われるアクセント句によって変わる言語である。このピッチ形の型による弁別が、アクセント核の位置ではなくアクセント句の句末部分の境界曲線声調によるとする児玉(2008)の主張は変わらない。鹿児島方言の場合、アクセ

---

<sup>8</sup> 児玉(2010a)参照。

ト句より上位に何らかのまとまりがあるかという点での先行研究での合意がないのであるが、児玉(2005)以降の句音調によって境界付けられた上位句がある、という主張を弱め、具体的な境界声調ではなく「句」規則の適用される領域として定義された「句」があるとする。この「句」が、鹿児島方言では下位のアクセント句と階層構造を成す、という主張は変わらない。

最後に、いわゆる弁別的なアクセントをもたない体系の中での、無アクセントと一型アクセントの区別についての研究動向を検討する。この区別と、これらの方言でピッチによって示されるまとまりをどういう句であるか、つまり上位の「句」であるとみるか、アクセント句であるとみるかは大きく関係すると思われるのであるが、この点についての見解の一致がないようである。

上野善道氏は、無アクセントを「句」の境界のみをピッチで示し、「句」の内部については何らの境界も定めないタイプの音調、一型アクセントを単一の音形のアクセント句をもちその境界を表示するタイプの音調として区別している。一型アクセント体系が「句」をもつとすれば、その「句」の内部にはアクセント句の境界が現われるはずである。これに対して、日本語学会での五十嵐陽介氏の発表では、一型アクセントと無アクセントはともに単一のアクセント句をなし、無アクセントは[+multiword AP]つまり、アクセント句内に境界なく複数の自立語(Word)をもちうるもの、[-multiword AP]の一型アクセントはもちえないもの、とする。この違いは、おそらく五十嵐氏が無核「アクセント句」を認めていることと無縁ではないだろう。無核アクセント句もまた、デフレージングによって複数のWordをもつアクセント句を形成するため、東京方言も[+multiword AP]と分類されることになる。どうやら五十嵐氏の(無核)アクセント句や無アクセント方言アクセント句は上野氏の「句」に相当するらしいのである。

少し揚げ足取りをすると、JTSのようにWord層を立てる分析では、[-multiword AP]という素性は矛盾を孕んでいる。Wordより上位のアクセント句層が必要になるのは、Wordが何かほかの語と組み合わせさせてWordと同等の単位を作るからである。Wordが組成が異なる複数のアクセント句に出現しないのであれば、つまり、アクセント句がデフレージングしないのであれば、WordのほかにAPという領域を立てる必要はないだろう。五十嵐氏のWordは「ひとつ以上の助詞に潜在的に後続される語彙項目」と定義されているので、文節ごとに特定のピッチパターンが決まる一型アクセントにアクセント句を想定することは問題ないのであるが、先に述べたようにJTSの考え方ではAPが不要な大阪方言に[-multiword AP]を割り当てるのはおかしい。

一方、もっと根本的な問題は、[+multiword AP]の多語アクセント句のそれぞれの Word が、ひとつずつアクセント句を構成したりデフレージングして単一のアクセント句を構成したりすることがあるものをいうのであれば、それは上野(2009)などで示された上野氏の「無アクセント」にはあてはまらない、ということである。無アクセントは「アクセント句」を定義できるような決まった音形パターンが定義できないものを言うはずである。

境界の深さを J-XToBI の BI を流用して表すと以下のような 3 種になるだろう。

(46) 無アクセント(「句」にのみ分割可)

- a. # Word # Word # (BI=3)
- b. \*# Word | Word # (BI=2)
- c. # Word Word # (BI=1) フレージング可

(47) 一型アクセント [-multiword AP](「句」、アクセント句に分割可)

- a. # Word # Word # (BI=3)
- b. # Word | Word # (BI=2)
- c. \*# Word Word # (BI=1) デフレージング不可(または制限あり)

(48) [+multiword AP](「句」、アクセント句に分割可)

- a. # Word # Word # (BI=3)
- b. # Word | Word # (BI=2)
- c. # Word Word # (BI=1) デフレージング(任意)

日本語学会で郡史郎氏は熊本市方言と宮崎市方言をともに「無」アクセントと分類して、他の「有」アクセント方言とともに、「句」境界の有無に相当すると思われる文節間の限定関係なし・ありに応じた 2 種類のピッチ波形を提示したが、熊本市方言の「句」境界のないほうの波形例は、明らかに BI=1 と BI=2 の 2 種類を含んでいるように思われる。熊本市方言のアクセントは筆者の観察でも 48 のパターンの 3 種類の境界が可能である。

(49) 熊本市方言

- a. %H マタ L%%H アメ]L%タイ                   「また#雨/飴だよ(どうせ)」
- b. %H マタ]L%アメ]L%パイ                   「また雨/飴だよ」
- c. %H マタアメ]L%パイ                   「また雨/飴だよ」
- d. %H マタアメパイ                   「また雨だよ(洗濯物を入れなさい)」

「句」の左側の境界音調を%H(「高起」としての[])アクセント句の境界音調を L%<sup>9</sup>とみ

---

<sup>9</sup> L%は、先行 1 音節以下の下降調か、次音節冒頭の急な下降として実現する。条件についてはさらに検

なせば、49a-c のマタとアメの間の境界は 48a-c に対応することになる。マタで失意・落胆や不満を表明する場合には、49b のようにアクセント句境界のみが現われマタの %H が通常より高いピッチではじまる高平調で実現する。また、コンサルタントによれば、このイントネーションではマタに後続する文でのデフレージングは起きず、アクセント句ごとの境界音調による下降が現われるようである。全体としてひとつの「句」で発話され、冒頭の H のピッチまたは上昇が強調される、という点では東京方言、京阪方言、鹿児島方言の対応するイントネーションと共通の特徴をもっているといえる。

熊本方言のイントネーション研究は比較的盛んであるが、デフレージングと「句」境界の分布に関心が向きがちである。馬場(2004)が報告している引用テの前のような比較的デフレージングが起きにくい位置で「句」境界とは異なる境界音調が現われることに関して、階層的な韻律構造の現われと解釈できるかどうかという観点から分析すべきであろう。一方、アクセントの弁別のない言語では、任意の意味単位を「句」なりアクセント句なりの境界によって切り出すことが可能であるように思われる。この点、アクセント素性が指定されない語が単独でアクセント句を構成することができない鹿児島方言のような二型アクセント方言とは異なると予想される。付属語など自立性の低い意味単位を中心に、これらがどんな境界音調で発話されるかについても母語話者の内省やコーパス分析による報告を待ちたい。

#### 4 まとめ

音調句が何を指すかについての見解の不一致は見られるものの、川上氏の「句」に相当するような韻律単位が存在してイントネーション実現に重要な役割をもっている方言が多い、という認識は今後ますます共有されていくものと思われる。郡史郎氏の意味的側面に注目した比較研究からも明らかなように、どうやら機能的に共通の性質をもつらしい「句」の理解には通方言的な視点が重要であると思われるので、研究対象となる方言や言語が増えていくことは大きな力になると考える。

筆者は児玉(2008)で鹿児島方言に観察されるようなアクセント句(音韻語)と音韻句の韻律構造階層が普遍的かもしれないと示唆したが、その立場は放棄する。普遍的な可能性があるのは「句」なのであって、その内部構造(のうち、「語」に至るまでの中間層)は同じ方言においてさえも変化しやすいものであり、下位にアクセント句のようなまとまりがあ

---

討が必要である。

ると考える必然性はない。鹿児島方言ではアクセント素性が指定されずアクセント句を単独で構成できない助詞がほとんどであるが、京阪方言では助詞に「式」があると考えたほうがよいし、複合語や複合動詞・補助動詞構文が1アクセント単位をなすかどうかは近縁の方言でも差がある<sup>10</sup>。

ただし、機能的に似ていると思われる「句」がどのように音韻論的に定義されるかには方言ごとの大きな差があり、「句音調」のような具体的な境界表示要素が抽出できるかどうかは方言に依存する。近年音声コーパスを用いた分析が一般化しているが、この点にはじゅうぶんな注意が必要であると考えられる。なぜこのような違いがあるのだろうか。

1954年に服部四郎氏が「アクセント素」を提案する根拠として、東京方言無核の「同なじか」と比較したときの「こんな時間」の「時間」や無アクセントとされる仙台方言を含めていることは、服部氏がこの時点で「音節連続をまとめる力」として想定したのが、境界声調削除ぐらいでは失われることがない、音韻論的に定義できる Word に固有の境界特徴の存在であったろうことをうかがわせる。管見では東京方言に関する限りその後それを実証するような音声的事実は確認されていない。とすると、東京方言において最小のまとめられた単位は、この冒頭の境界声調の力が発揮された「句」(あるいは論者によっては「アクセント句」)であるということになる。少なくとも、境界声調をもつような最小の単位は「句」であろう<sup>11</sup>。これに対して、京阪方言や鹿児島方言では、「語」や「アクセント句」がそれぞれ固有の境界声調対立がもつ「まとめる力」の及ぶ範囲となっている。このため、下位のまとまりを維持しながら「句」を実現しているのが、下位のまとまりを単位としてその関係を調整するルール(26,43)から成る「つなぐ力」になっていると考えればよいのだと思う。鹿児島方言のように、下位のまとまりに右側の境界声調が使われている場合には、左側の境界に「まとめる力」を求めてもよいはずで、おそらくそのような方言もあるはずである。熊本市方言の場合は、下位の「まとめる力」が「つなぐ力」の領域を侵食している、と考えればよいのである。

「まとめる力」と「つなぐ力」は、他の言語にも応用できる考え方である。たとえば、1章のはじめに挙げたテルグ語は、語頭固定の強勢をもつ言語であるが、この語頭強勢は常に境界声調 L%を伴っていて、L\*%..H%というピッチパターンが「まとめる力」を実現し

---

<sup>10</sup> 児玉(2010b)参照。

<sup>11</sup> 服部(1960: 264)でアクセント素の根拠とされている摩擦音化や鼻音化の不在のような分節音異音の分布は、規則適用の障壁となるような境界の存在として分析できようが、領域を「まとめる」際に常に分布するわけではない。

ている。たとえば、後接語のような無強勢語は、この力によって前の語とともに「アクセント句」を形成する(6ab)。語と語の間や内部構造を持ち副強勢をもつ語の場合には、H%の実現を主強勢部分にのみ置くよう制御する「つなぐ力」で「句」を実現している(7)。熊本方言の場合と同様に、「まとめる力」が「つなぐ力」の領域を浸食して、副強勢が実現しないで複数の語がL\*%..H%のアクセント句にまとめられた「焦点句」となる、という分析が可能な発話もある。

「まとめる力」によってであれ「つなぐ力」によってであれ、多くの言語が、最小で(単独で発話できる)1語、あるいは複数の語を含む音韻論上の領域(「句」)をもっている、ということから、これを人類の言語に普遍的な音韻論上の単位として仮定することにより、さまざまな考察ができる。「句」が離散的な(弁別可能な)音韻論的実現を複数もっていて、これが多くの「イントネーション」の実現に関与している、という観点は、一見多様にみえるイントネーションの実現形を整理して分析していく糸口になるはずである。前提となるのは、「句」がどのように実現しているかの分析と、そのうちで可変的とみられる特徴の音声的实现がどのような最小弁別対をなすかの検証である。面接フィールドワークによる研究に加えて、コーパスに基づく音声研究は今後ますます進展すると考えられるが、コーパスからイントネーション上の特徴的な実現形を発見することと合わせて、それらを分析して対立のありかたを検証する理論研究の方法が有機的に組み合わせられるような研究が求められると思われるが、その意味で「句」の存在が広く認識されていることは重要であると考えられる。

## 参考文献

- 上野善道(1984)「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古稀記念論文集』2(言語学篇) 東京：明治書院. 347-390.
- 上野善道(1989)「日本語のアクセント」杉藤美代子(編)『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻(上)』三省堂 390-347
- 上野善道(2009)「服部音韻論の再評価」『東京大学言語学論集』28:219-246
- 川上夔(1956)「文頭のイントネーション」『国語学』25:21-30.
- 川上夔(1957a)「東京語の卓立強調の音調」『国語研究』6:21-31.
- 川上夔(1957b)「準アクセントについて」『国語研究』7:44-60.
- 川上夔(1962)「京阪アクセントの分析的表記法」『音声学会会報』109:10-12.



- 川上泰(1964)「段階アクセントから方向アクセントへ」『国語国文』354(33-2).37-47.
- 川上泰(1984)「アクセント研究の問題点」『金田一春彦博士古稀記念論文集』2(言語学篇) 東京：明治書院 147-166.
- 郡史郎(1997a)「『当時の村山首相』の2つの意味と2つの読み:名詞句の意味構造とアクセント弱化について」『文法と音声』くろしお出版.123-146.
- 郡史郎(1997b)「日本語のイントネーション -型と機能-」『日本語音声[2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂.169-202.
- 郡史郎(2006)「熊本市および周辺の非定型アクセント」『音声研究』10:2.43-60
- 児玉望(2005)「鹿児島タイプ二型アクセントの音調句」『熊本大学言語学論集 4』281-307.
- 児玉望(2007)「音調句と日本語韻律構造」『熊本大学言語学論集 6』1-22.
- 児玉望(2008)「曲線音調と日本語韻律構造」『熊本大学言語学論集 7』1-40.
- 児玉望(2009)「出水方言のモーラ声調単位とイントネーション」『熊本大学言語学論集 8』1-26.
- 児玉望(2010a)「方言音声コーパスの韻律構造表示～鹿児島県立図書館方言採録テープの分析～」『熊本大学言語学論集 9』1-28.
- 児玉望(2010b)「付属語のアクセント - 鹿児島方言」上野善道監修『日本語研究の12章』明治書院 475-489
- 服部四郎(1960)『言語学の方法』岩波書店
- 馬場良二(2004)「熊本方言における引用の助詞『て』を含む節の韻律について」『電子情報通信学会技術研究報告』
- 早田輝洋(1969)「単語のアクセントと文のアクセント」『文研月報』20.8.(早田 1999 所収 pp276-309)
- 早田輝洋(1972)「文における声の高さの型について」服部四郎先生定年退官記念論文集編集委員会編『現代言語学』東京：三省堂.(早田 1999 所収 pp310-334)
- 早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』東京：大修館書店.
- Chomsky, Noam and Morris Halle. (1968). *The Sound Patterns of English*. Cambridge. (SPE)
- Pierrehumbert, Janet and Beckman, M.E. (1988). *Japanese Tone Structure*. Cambridge. (JTS)
- Kelly, Gerald (1959) 'Telugu Vowel Phoneme' *Indian Linguistics* 20. 146-158.
- Kelly, Gerald (1963) 'Vowel Phonemes and External Vocalic Sandhi in Telugu' *Journal of Oriental and American Society*. 83. 66-73.
- Wilkinson, Robert W. (1974) 'Tense/Lax Vowel Harmony in Telugu: The Influence of Derived

Contrast on Rule Application' *Linguistic Inquiry* 5. 251-270.

前川喜久雄・五十嵐陽介・菊池英明・米山聖子(2004)"『日本語話し言葉コーパス』のイントネーションラベリング Version 1.0"

<http://www.ninjal.ac.jp/products-k/katsudo/seika/corpus/public/pdf/xjtobi.pdf>

五十嵐陽介・菊池英明・前川喜久雄(2006)「第7章 韻律情報」報告書『日本語話し言葉コーパスの構築法』

[http://www.ninjal.ac.jp/products-k/katsudo/seika/corpus/csj\\_report/](http://www.ninjal.ac.jp/products-k/katsudo/seika/corpus/csj_report/)